

# 価値観を変えるソーシャルアクションの試み － 生理の“貧困”と“尊厳”を例に －

永山みのり，竹端寛

キーワード：生理，性教育，女性の権利，貧困対策，ソーシャルアクション

## 1. はじめに

本論文は永山みのりによる同名の卒業論文を短縮して掲載するものである。1～5 節は永山が単独で執筆し，竹端は6 節でコメントをしている。

### 1.1 研究テーマの背景

近年，コロナ禍による物価上昇や収入減等の経済的影響から「生理の貧困」問題が世界各地で急速に注目を集めている。「#みんなの生理」<sup>1)</sup>・プラン・インターナショナル USA<sup>2)</sup> の調査によると，過去1 年で生理用品を入手するために他のものを我慢するなど，金銭的理由で生理用品の入手に苦労したことがある若者の割合は5 人に1 人にものぼる。内閣府は問題に対応すべく「経済財政運営と改革の基本方針 2021」<sup>3)</sup>にて「生理の貧困対策」を初めて明記，男女共同参画局は「地域女性活躍推進交付金つながりサポート型」<sup>4)</sup>（交付上限一律 1125 万円）を打ち出した。その中に「女性用品の提供」を申請内容に含められるようになったことを機に，地方自治体による生理用品の無償提供は全国的な広がりを見せている。

一方，「生理の貧困」支援は自治体によって内容やその充実度，住民の認知度にはムラがある。厚生労働省による調査<sup>5)</sup>（2022）では生理用品の購入・入手に苦労したことが「ある」人のうち，約2 人に1 人が居住地域に生理用品を受け取れるような制度があるか「分からない」と回答。また，制度を知っている人のうち，利用したことがある人は17.8%にとどまる。市区町村での無償提供を知っていたが利用しなかった理由として「必要ないから（69.8%）」のほか，「申し出るのが恥ずかしかったから（8.5%）」「人の目が気になるから（7.8%）」「対面での受け取りが必要だったから（6.2%）」等が挙げられた。

こういった現状を打開するには，生理用品を購入できない“貧困”者のみをターゲットにした支援ではなく，生理用品を手に入れることは誰もが持つ“尊厳”として尊重される支援の在り方，そして日本

に長年蔓延る“生理はタブーであり自己責任”とする社会的規範の見直しが必要なのである。本研究では，長年タブー視されてきた「生理」にまつわる課題とその背景を整理し，兵庫県立大学姫路環境人間キャンパスでの生理用ナプキンの無償提供をソーシャルアクション事例として記述した。

### 1.2 用語の定義

今日も様々な議論があるが，本文で使用する各用語は下記の定義で用いた。

「生理の貧困」：何らかの理由から生活に欠かすことのできない生理用品にアクセスすることができない状態のこと。経済的な理由から購入することができない状態だけでなく，家族や周囲の人の理解を得られず必要な量を手にするのが難しい状態や，適切なケアや知識にアクセスできていない状態及びそのために誤解が生じていたり機会を失っていたりする状態などを広く含める。

「生理の尊厳」：生理を忌むべき・恥ずべき・隠すべきものとせず，女性の権利かつ日常生活の一部として尊重し，互いの心身の辛さを分かち合える社会を目指すための概念。生理用品の無償提供は経済貧困者のみでなく，全ての女性に用意されるべきであるという考えの根本となるもの。兵庫県明石市の生理用品サポート事業「きんもくせいプロジェクト」担当の明石市ジェンダー平等推進室が使用していた用語を，著者なりに解釈した。

「ソーシャルアクション」：生活問題やニーズの未充足の原因が社会福祉関連制度等の社会構造の課題にあるとの認識のもと，社会的に不利な立場に置かれている人々のニーズの充足と権利の実現を目的に，それらを可能にする法制度の創設や改廃等の社会構造の変革を目指し，国や地方自治体等の権限・権力保有者に直接働きかける一連の組織的かつ計画的活動およびその方法・技術。高良（2017）<sup>6)</sup>の「暫定的定義」を用いる。

## 2. 調査手法

### 2.1 本研究におけるソーシャルアクションの取り組みについて

#### 2.1.1 キャンパス内の一部の女子トイレに生理用ナプキンの入ったかごを設置

以下、「トライアル設置」と表記する。学生団体 SOGI いろ<sup>注1)</sup> が主催する学内イベント「SOGI ウィーク」<sup>注2)</sup> 内企画の一つとして実施した。概要は下記の表の通りである。

- ・期間：2022年10月21日(金)1～10月28日(金)
- ・内容：生理用ナプキンの入ったかごを対象トイレのすべての個室に設置し、毎日夕方に補充を行った。／個室の壁に Google フォームの QR コードを印刷した紙を貼り、随時アンケートを実施。
- ・設置個所：5か所：A棟1階・4階、F棟1階・3階、L棟(生協会館)1階の女子トイレ 計22個室
- ・対象：姫路環境人間キャンパスを利用する女子学生及び女性職員
- ・生理用ナプキンのスペック：エリス新 素肌感多い日の夜用羽根つき 20個入×18パック×2箱(大王製紙株式会社)／ロリエ肌キレイガード 昼用羽なし 30個入×24パック×4箱(花王株式会社)計3,600個



写真1 設置方法1



写真2 設置方法2



写真3 設置方法3



写真4 設置方法4

1週間、対象箇所のトイレの個室に生理用ナプキン「ロリエ肌キレイガード昼用羽なし」7枚と「エリス新・素肌感多い日の夜用羽根つき」5枚ずつを入れたかごを設置。設置方法は、個室に荷物を置く奥行きのあるトイレにはかごを平置きし(写真1・2)、そのようなスペースがないトイレには S

字フックを用いて手すりに吊り下げ設置した(写真3・4)。また、個室の壁には Google フォームの QR コードを印刷した紙を貼り、利用者を対象に随時アンケートを集計。補充は学生団体 SOGI いろのメンバーが毎日夕方に行い、同時に各個室の在庫も記録した。

設置個所については、後述のアンケート調査の結果をもとに学生の利用頻度が高い場所から選定。また、SOGI ウィークに合わせてトライアル期間を1週間に限定することでトライアル設置期間と生理周期が重ならない学生の存在も予想されたが、各所の許諾や費用面を鑑み、短い期間での実施となった。提供用の生理用ナプキンおよび設置用のかごについては、企画当初どのように用意するか難航していたが、姫路市危機管理室より、倉庫に保管中であった防災備蓄品として役目を終えたものを寄付していただいた。なお、今回の寄付についてはあくまで試行的な取り組みとしてご協力いただいた。

#### 2.1.2 ライフデザイン論でのプレゼンテーション

2022年10月26日(水)、「生理の貧困と尊厳」をテーマとし、学生がソーシャルアクションを起こす意義と可能性について10分ほど発表した。また、SOGI ウィーク期間中、つまりトライアル設置期間中でのプレゼンテーションの機会であったため、トライアル設置の宣伝も目的とした。

#### 2.1.3 神戸新聞社姫路支社の記者の方からの取材

2022年11月10日(木)、竹端先生のご紹介で、ゼミ室にてトライアル設置について取材していただいた。

## 2.2 選定・実施理由

トライアル設置の実施理由は、生理にまつわる諸問題を改善することにより、すべての人にとって安心して過ごすことができるキャンパスの実現への第一歩になると考えたためである。生理がある人に生理がもたらす影響はとて大きいもので、生理痛やPMS (Premenstrual Syndrome: 月経前症候群) に悩まされる学生も少なくない。日常に支障をきたす場合もあるにもかかわらず、いまだオープンに話すことをタブー視されている側面もある。兵庫県立大学にも、経済的・心理的な理由や正しい知識がないばかりに、生理に関してひとりで苦しんでいる学生がいるかもしれない。不安や苦痛を感じている学生たちの“声なき声”を聞き、様々な困りごとやニーズを把握したうえで、今後大学本部に向けて学内制度の見直し・導入を提案することを目的とし、トライ

アル設置を企画した。

ライフデザイン論でのプレゼンテーションは学生たちに、ソーシャルアクションを起こすことで実際に学内の制度が変えられる可能性について感じてほしかったからである。これからの環境人間学部を学生のチカラでより魅力的なキャンパスにするためのソーシャルアクション発起人が出てくることを期待する。

神戸新聞の取材を受けた理由は、国公立大学である兵庫県立大学においてこのような取り組みを行うことに意義があると感じ、それを地域の人々にも知ってもらうことで性別や世代を超えて生理の価値観について今一度見直す機会をもたらしたいと考えたからである。既に生理用品の無償提供を学校の制度として導入している大学として龍谷大学や大阪大学等が挙げられるが、どちらも生徒数やキャンパスの規模が兵庫県立大学とは比にならず、また企業との連携も盛んである。地域とのつながりを日ごろから掲げている環境人間学部でのソーシャルアクションを成功に導くには、より多くの地域住民から共感を得ることが後押しになるのではないかと考えた。

### 3. 調査結果

#### 3.1 トライアル設置に関して

##### 3.1.1 トライアル設置開始前の意識調査

2022年10月18日(火)の文化社会調査法演習、10月20日(木)の人間分野総合講義にてアンケート調査を行った。回答者は文化社会調査法演習受講者30名 有効回答数30件(女子生徒18名, 男子生徒12名), 人間分野総合講義受講者155名 有効回答数141件(女子生徒108名, 男子生徒31名, “その他”1名, 性別欄無記入1名)。質問項目は、女子生徒向けには質問①から③の3問, 男子生徒向けには質問④を用意し、回答してもらった。

表1 質問①これまでの学校生活の中で、生理によってどのような影響・悩みがありますか。(複数回答可)

	n=126
学校を欠席・遅刻・早退したことがある	28 (22.2%)
授業に集中できない	79 (62.7%)
生理痛やPMSがづらい	83 (65.9%)
相談できる人がいない・少ない	13 (10.32%)

急に生理になり、生理用品を友達から借りた・買いに行ったことがある	90 (71.4%)
急に生理になり、生理用品以外のもの(トイレットペーパー等)で代用したことがある	72 (57.1%)
からかわれるなど、恥ずかしい思いをしたことがある	3 (2.4%)
その他	8 (6.35%)

「その他」には、「生理用品がかさばり荷物になる」、「生理中は短い休憩時間の中で余裕をもってトイレに行くことができない」、「毎月生理になるのを気にしながら生活するのがしんどい」、「怖い」という回答が見られた。多くの回答が集まった「友達から借りた・買いに行った」、「他のもので代用した」とも併せて、誰もが安心して学校生活を送るためには、気軽にいつでも生理用品へアクセスできる仕組みの必要性を裏付ける結果と言える。

表2 質問②SOGI ウィーク期間中、試行的に生理用品を一部の女子トイレに設置しますが使いたいと思いますか。

	n=126
はい	104 (82.5%)
いいえ	19 (15.1%)
どちらとも言えない	3 (2.4%)

トライアル設置を使いたいと回答した理由としては、「節約にもなるし、荷物が減るから」、「経血量が多いときに助かるから」など様々だったが、最も多くみられたのが「急に必要になった場合ありがたい」という意見だった。質問①からも急に生理になり、生理用品を友達から借りたり、買いに行ったり、生理用品以外のもので代用してその場をしのいだ経験がある人が多いことから、生理用品のアクセスの確保の重要さは明らかである。

「いいえ」の理由としては、「自分に合ったものを使いたい」、「もしいきなり生理になって生理用品を持っていなかったら使うが、他の人に見られるのが恥ずかしいため、そのような状況にならない限り使いたくない。」という意見が挙げられた。“生理用品”と言っても、タンポンや月経カップ・ショーツ型ナプキン・おりものシートと、多様化が進んでいる。ナプキンだけでも長さや厚み・素材・羽(ナプキンがショーツからずれないように固定するためのシール部分)の有無等、メーカーによってさまざま

だ。無償提供において生理用品の選択肢を多く用意しておくことも必要であることが分かった。

表 3 質問③あなたがキャンパスの中でよく利用するトイレを3か所教えてください。(自由記述)

	n=119
A 棟 1 階	30
A 棟 2 階	10
A 棟 3 階	23
A 棟 4 階	103
F 棟 1 階	29
F 棟 2 階	3
F 棟 3 階	24
L 棟 (生協会館) 1 階	18
その他	7

1か所および2か所だけ回答した人がいたため回答者数×3と回答数は一致していない。「その他」には、E棟1～3階・I棟(体育館)・G棟(学術情報館)・P棟(いちよう南会館)が挙げられた。なお、この質問の結果をもとにトライアル設置の実施箇所を決定した。

表 4 質問④生理に対するイメージで当てはまるものを教えてください。(複数回答可)

	n=43
どう辛いのかどうサポートすればよいか具体的によく分からない	28 (65.1%)
声をかけること自体、遠慮してしまう・遠慮すべきだと思う	14 (32.6%)
女性と男性で知識量にギャップがあると思う	32 (74.4%)
生理について知る・学べる機会があればいいのと思う	12 (27.9%)
全く関心がない・特に何も思わない	2 (4.7%)
その他	2 (4.7%)

生理はしんどいものというイメージ・支えになってあげたいという意識はあるものの、いざという時の対応に困っている様子が見える。「全く関心がない・特に何も思わない」の回答が多くなるのではないかという筆者の予想を大きく裏切る結果となり、男子生徒向けに生理の尊厳アプローチをすることの可能性が見えてきた。

### 3.1.2 トライアル設置が終了後のアンケート調査

11月1日(火)の文化社会調査法演習、11月3日(木)の人間分野総合講義にて行ったアンケート調査の結果をまとめる。総回答者数は179名で、対象者の性別については女子生徒126名、男子生徒49名、「性別を回答しない」4名。質問項目は、女子生徒には質問①～⑥の計6問、男子生徒には質問⑤と⑥の計2問を用意し、回答してもらった。

表 5 質問①あなたは生理用品のトライアル設置を利用しましたか？

	n=130
利用した	10 (7.7%)
利用していない	120 (92.3%)

表 6 質問②利用した人は、その理由を教えてください。(複数回答可)

	n=10
急に必要になったから	7 (70%)
たまたまあったから	3 (30%)
持参していたが便利だから	2 (20%)
教室から持ち出しにくいから	2 (20%)
買えない または買ってもらえないから	1 (10%)

表 7 質問③利用していない人は、その理由を教えてください。(複数回答可)

	n=120
生理期間と重なっていなかった	95 (79.2%)
持参しているものを使った	18 (15.0%)
利用することに抵抗があった	4 (3.3%)
必要ない	1 (0.8%)
トイレに行っていない	1 (0.8%)
トライアル設置を知らなかった	0 (0.0%)

生理期間は3～7日間が正常とされているので、「生理期間と重なっていなかったから」利用しなかったという回答が多くなったのは当然の結果である。また、人間分野総合講義は1回生の必修授業であるが、1回生は木曜日以外に姫路工学キャンパスで講義を受け、週に一度の木曜日のみ姫路環境人間キャンパスに登校している。よって、生理周期と数日間は重なっていた人でも登校するタイミングによって利用する必要がなかった生徒の存在も予想される。

表 8 質問④生理用ナプキンを選ぶ決め手は何ですか？  
(複数回答可)

	n=130
羽根つき	38 (29.2%)
サイズ	26 (20.0%)
付け心地	23 (17.7%)
価格	20 (15.4%)
素材	10 (7.7%)
持ち運びやすい	5 (3.8%)
かぶれにくい	4 (3.1%)
吸水力	2 (1.5%)
香り付き	1 (0.8%)
羽なし	1 (0.8%)
安定感	1 (0.8%)
特になし	1 (0.8%)

表 9 質問⑤大学のトイレに生理用品を設置することについてどう思いますか？

	n=179
必要なことだと思う	150 (83.8%)
どちらとも言えない	29 (16.2%)
必要でない	0 (0.0%)

受講生 179 名のうち約 8 割を超える生徒が「必要なことだと思う」と回答した。また、「どちらとも言えない」と回答した生徒からは、設置した生理用ナプキンの悪用を心配する声や、継続して運営する仕組みが気になるという声があった。トライアル設置の重要なキーワードである『必要な時に、気軽に、誰でも利用していい』という部分を十分に発信・周知できていない状態から始まったトライアル設置ではあったが、大学のトイレに生理用品は「必要でない」と答えた学生は一人もいなかった。このことから、いかに学生にとって生理および生理用品についての問題意識があるかがうかがえる結果となった。

質問⑥学校のトイレに生理用品を設置することを、もし続けることになった場合、改善や工夫した方がよいと思うところがあれば聞かせてください。特にご要望がなければ、利用してみたご感想を教えてください ※回答を分類し、一部抜粋し表記。

○生理用ナプキンの種類について  
サイズや種類をもっと豊富にしてほしい (8 件) / 羽付きなのか羽なしなのか、サイズが分かるように

示してほしい (1 件)

○生理用ナプキンの入れ物・置き方について  
蓋をつけてほしい (3 件) / 取り出しやすいように詰めすぎない方がいい (1 件) / かわいい入れ物に入っていると嬉しい (1 件) / 落ちにくい入れ物にしてほしい (1 件) / 目立つように置くのではなく、さりげなく置く (1 件)

○生理用ナプキン設置の運営について  
清潔感や衛生面に気をつけてほしい (3 件) / 適切な利用を促すべきだと思う (1 件) / アルコール消毒を徹底する (1 件) / 運営を SOGI いろだけに任せるのではなく自分たちでも補充できる仕組みなどをつくり持続的に取り組みを続けてほしい (1 件)

○その他の要望

これからも長期間で設置を続けてほしい (15 件) / すべてのトイレに設置してほしい (2 件) / 私は痔等になった経験がないため必要になったことがないが、男性でも痔の人等は必要になるという話を聞いたので、可能であれば男子トイレにも若干量でも設置すれば良いと思う (1 件) / 男子トイレにも、ナプキン特集のようなものを貼ってみる (1 件)

### 3.1.3 設置場所別 使用された生理用ナプキンの数

表 10 ロリエ肌キレイガード 昼用羽なしを「昼用ナプキン」、エリス新・素肌感多い日の夜用羽根つきを「夜用ナプキン」と表記。

設置場所	昼用ナプキン	夜用ナプキン
A 棟 1 階	26	14
A 棟 2 階	17	8
F 棟 1 階	10	13
F 棟 3 階	12	7
生協会館 1 階	12	6
合計	77	48

トライアル設置開始時点に昼用ナプキンを 154 個・夜用ナプキンを 110 個 計 264 個を設置し、終了時点で昼用・夜用合わせて 125 個減っていた。よって、1 週間での使用率は約 47% だった。

### 3.2 ライフデザイン論内のプレゼンテーション

「生理の貧困」問題は経済的な理由で生理用品を入手できないこと以外にも、周囲の理解を得られない環境や、適切な知識を学べない状況を広く含むということを知り、自身も問題の当事者であると認識が変わったことを自覚する受講者がみられた。

### 3.3 神戸新聞の取材

2022年12月8日(木)に神戸新聞のWebページにて取材記事が公開、翌日9日(金)には神戸新聞全県版(朝刊)の22面「ひょうご総合」、Yahoo!ニュースにも掲載された。朝刊には『生理用品公衆トイレ常備を県立大生、無償提供し意識調査8割が賛成「あるのが当たり前」の存在に』という見出しで、トライアル設置を始めるまでの経緯やトライアル設置中の出来事等について掲載された。

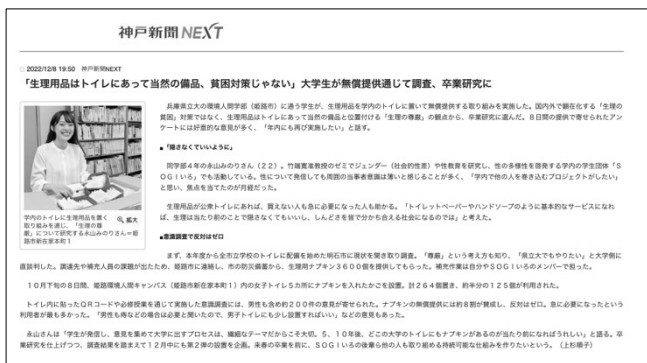


写真5 12月9日(金)神戸新聞

### 4 考察

#### 4.1 「生理の貧困・尊厳」に対する考察

本調査でのアンケートでは10人中7人、明石市の調査でも58人中43人が「急に必要になったから設置中の生理用品を利用した」と回答しており、「買えない、または買ってもらえないから」は他の選択肢よりも選択率が低かった。このことから、大学における生理用品の無償提供は“貧困”目線と併せ、困っているときに当たり前前に選択肢が用意されている“尊厳”目線の支援を取り入れることが求められていることが分かる。

現状の地方自治体による生理用品サポート事業の多くは、貧困女性の相談対応及び支援へ繋げるための手段として位置づけられている(例:兵庫県宝塚市「学生等に生理用品配布を手段とし、配布の際に各種相談窓口へ繋げるための案内を同封し、相談等支援につなげた。」、兵庫県神戸市「神戸市男女共同参画センターやハローワーク等にて、事業の広報物を添付した生理用品を配布」<sup>7)</sup>)。また、配布は役所や自治体の関連施設等の窓口・学校では保健室での手渡しが原則であるケースが多く、受け取りに際する「誰にも見られることなく受け取りたい」、「貰いに行くのが恥ずかしい」という心理的ハードルの高さが指摘できる。

また、日本における生理に対する配慮が十分でないのはジェンダー配慮の欠如に要因があるとも言える。生理のみならず性そのものを誰もが平等に持っている権利・尊厳として包括的に学べる性教育、それを踏まえた社会システムや制度を導入・定着化するために、まずはこの生理問題にまつわる社会的関心度を上げ、性は誰もが平等に持っている尊厳の1つであるということを広く認知させていく必要がある。

「生理によってどのような影響・悩みがありますか」という質問では、『毎月生理が来るのを気にしながら生活するのがしんどい』、『怖い。』と回答した女子生徒がいた。「生理」と聞くとどうしても心身の不調を真っ先にイメージし、他者にしんどさを理解してもらえなかった、からかわれた、楽しみにしていた予定を諦めたというような苦い経験を思い出す人が多いのではないだろうか。

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン(2021)の調査<sup>2)</sup>によると、初潮を迎えたときに誰に教わったのかについて「母親」「学校の教員」との回答が多くみられ、特に「母親」から教わったとする回答が10人に6人だった。そのことに関連し、同法人は『日本で紙ナプキン「アンネ」が発売された1961年、アンネナプキン発売時に月経期にあった女性の多くは「初潮を迎えたときに誰にも教わったことが無い」と回答している。ユース女性にとって祖母に近い世代に該当する世代が処理の方法を教わっておらず、その祖母から生理の対処方法を教わった母親から、現在のユース女性が生理の対処方法などを学んだとするならば、その知識は限定的にならざるを得ないことや、長い歴史の中で生理を「忌むべき、秘すべき、恥すべき」と捉えられてきた生理に対する眼差しが伝えられたことが推察される。』と発表している。今日においても生理を忌むべきものとする生理への忌避感の伝達は、家庭での生理教育が大きな影響を及ぼしている可能性が高い。

本アンケート調査では男子生徒43人中、半数以上の生徒が「どう辛いのか、どうサポートすればよいか具体的によく分からない」・「女性と男性で知識量にギャップがあると思う」、13人が「生理について知る・学べる機会があればいいのと思う」と感じていることが明らかになった。日本は世界的に見ても性教育がかなり遅れていることが指摘されて久しい。とりわけ保健体育科で生理(月経)について取り上げる際は男女が別々の教室で授業をする

学校が多く、生理について学んだことは男子に知られてはいけない隠すべき出来事とされるケースさえある。そのように性別によって隔離された影響からか、本調査対象の中からはあまり見られなかったものの、全体で見れば生理の基礎知識や関心・問題意識が全くないという男子も一定数存在する。

本研究では、男性こそ生理について知るべきだということを言いたいのではなく、女性でも意外と自分のからだのことをよく理解していない人は少なくない。まず自分のからだを知り、その次のステップとしてまわりの人が理解していく、互いのことを想像できるようになることが大切なのではないか。

これら、なぜ「貧困」目線の生理観が主流なのか、なぜ生理にマイナス・ネガティブなイメージがあるのか、なぜ男女間で認識のズレが起こっているのか、という問いに共通する答えは、「日本における性教育の不充実さ」である。反対に言えば、“尊厳”目線というプラスでポジティブなイメージをもって、性別や年齢・職歴に関わらず生理の辛さを共有できる社会を作るには、包括的性教育を迅速に導入すること、社会人が性にまつわる学びを受けられる機会を増やすことが必須だ。

日本における性教育は、通称「はどめ規定」（国定学習指導要領において「人の授精に至る過程・妊娠の経過は取り扱わないものとする。」とされていること。）によって、系統的ではあるが性の生理的な側面の知識に片寄りがちで、子どもの心身の発達の個人差や個々の具体的な悩みや関心に対処しにくいという課題がある。

そこで、ピアカウンセリングやアクティブラーニングなどの教育法を取り入れ、生徒同士で性について話し合う機会を設け共感し合うことで自己有用感を高め「性教育の知識は自分の今後の生活に関わってくることである」という意識を高める性教育を行うべきであると考えられる。（松本ら 2022）。<sup>8)</sup>

大人向けの講座としては、民間企業やNPO法人による活動が挙げられる。株式会社ユニ・チャーム<sup>9)</sup>は生理に関する知識向上と職場における相互理解を促進する研修プログラム「みんなの生理研修」を、株式会社日経 BP<sup>10)</sup>は「生理快適プロジェクト」を実施している。また近年では生理休暇を採用する企業も徐々に増加している。生理がある人もない人も、まず「知る」ことで相談しやすい環境をつくること、今までになかった男性の意見を聞く機会や女性同士で生理について話し合う機会をもたすメリットが考えられる。

生理がある日もともに過ごしたり仕事をしたりしていく以上、お互いにもっと話して、理解していく関係性づくりが、潜在的にはあるが実はかなりの程度で求められているのである。

## 4.2 本ソーシャルアクションの試みに対する考察

図1, 2に沿って本ソーシャルアクションの流れについて説明する。図1の中央にある制度から排除されている人々（クライアント・システム）とは様々な理由から生理用品を必要な時に十分な量をすぐに手に入れられない人や、生理にまつわる何らかのモヤモヤを抱えながら学校生活で我慢を強いられている人を指す。まずそんな彼女らを取り巻く学内ルールや設備等の課題とニーズを明確にするため、日ごろのゼミ活動を通して「生理の貧困」問題や日本国内外における性の価値観について学び、性や生理にまつわる困りごとをゼミ生たちと共有してきた。すると兵庫県立大学環境人間学部では、生理痛やPMSによる体調不良のようなやむを得ない欠席でも教員が定める上限を超えると単位を取得できない場合があること・多くの学生が利用する生協ショップでは緊急時でも生理用品を買うのが恥ずかしく抵抗感があること等の課題があることが明らかになった。

そんな中で、明石市の公立学校では既に生理用品が無償で提供されていることを知り、姫路環境人間キャンパスでも実施できないかと考え、校内のトイレ環境を見て回ったところ生理用ナプキンを置けるスペースが十分にあることが分かった（①）。その後、それらの情報と提案を書類にまとめ学務課や事務室で働く職員の方にお話しする機会を頂くことができたため（②）、本格的にニーズに対応する集団（アクション・システム）として学生団体SOGI いろ発の企画が動き出した（③）。そこから、大量に生理用ナプキンを譲ってくださった姫路市役所ご協力のもとトライアル設置を実施し（④）、学生たちからも良い評価を得ることができ、ニーズを充足しエンパワメントの達成ができたと言えるだろう。

卒業論文執筆時点の1月下旬、ここから生理用品の無償提供を学校の制度として導入・定着するために、権限保有者つまり大学本部及び兵庫県庁に、制度化の交渉・協働（⑤）、さらに学内ルールや設備の構築、権力や関係等の構造の変革、ニーズの充足と権利の実現...という展開へと進めていくが、こ

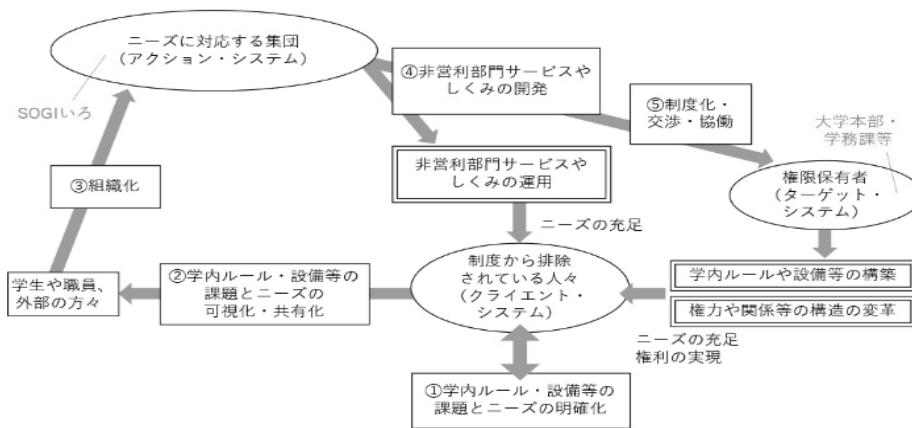


図1 ソーシャルアクションのプロセス<sup>注3)</sup>

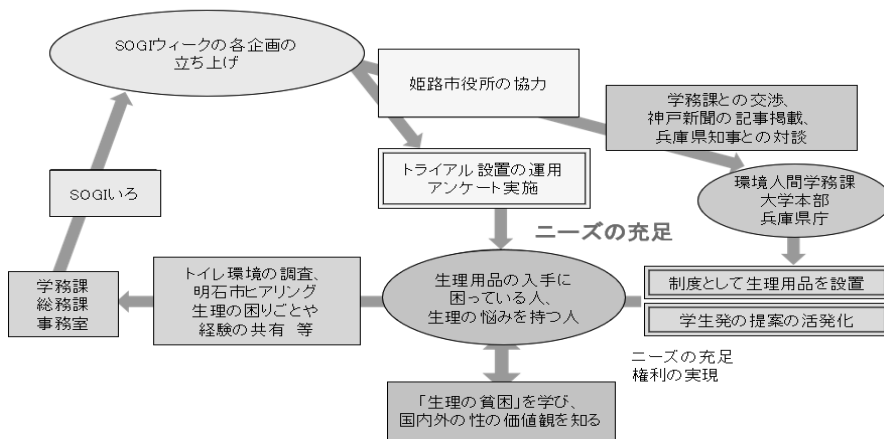


図2 ソーシャルアクションのプロセス (具体化)

れまでの企画は期間限定かつ試行的なボランティア活動であるからうまくニーズの充足に到達できたのであって、④以降の展開は権利関係上、残念ながら学生のみではどうにもならないこともある、と予想していた。

ところが2月上旬、知事が12月に掲載された神戸新聞の記事をお読みにになり、直接話を聞きたいとご連絡をくださった。その結果、2023年2月16日(木)13時15分から14時までの間、兵庫県庁にて、トライアル設置について発表し、生理用品サポート事業は貧困目線ではなく、尊厳を守る取り組みとして普及してほしいという旨をお伝えした。その様子は、2月17日(金)の神戸新聞にて掲載。2月の補正予算では、生理用品の無償配布を私立大学や県立大学にも支援対象を広げ、関連諸費を含めた2600万円を追加提案することにもなった。知事は「拡充のきっかけは県立大学での取り組みを記事で知ったから」と仰っており、まさにソーシャルアクションのサイクルがうまく動いたのである。

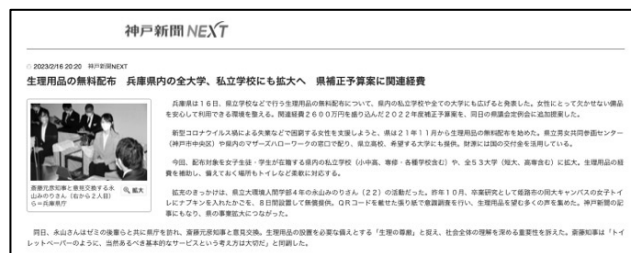


写真6 2月17日(金)神戸新聞

## 5. おわりに

### 5.1 まとめ

大学内での生理用品の無償提供は、経済的には困窮していない学生にとっても高い需要がある。その上で、無償提供は“貧困”対策ではなく“尊厳”と“平等”の基礎として、周知する必要がある。

また、性や生理の話題は積極的には行われていないが、程度の差はあっても性別に関係なく問題意識



を持っている学生は多い。生理及び生理用品の無償提供は、生活を共にする仲間として女性だけのものではないという共通認識を持ち、性別や年代を越え社会全体の“生理リテラシー”水準を底上げするような機会の提供が急務である。

そして、“大学生という一定の公共性”がある大学生のうちに起こすソーシャルアクションは周囲の理解と協力を得やすく、エンパワメントを図ることで学生主体の社会的課題の解決へ一石を投じる十分な力がある。

日本で生理用品が他の衛生用品と同じくベーシックサービスとして用意されない背景には、包括的性教育の不充足からくるジェンダー配慮の欠如と、長い歴史の中で継承された生理に対する忌避感があると分かった。その点を考慮すれば、生理用品の無償提供のあり方にはまだまだ議論の余地があり、個人の経験と価値観が直接反映されるような繊細なテーマだけに慎重に進めていく必要がある。

また本調査を通して特に印象的だったことの1つは、生徒たちから『男子は「生理」についてどう感じているのか知りたい。決して「生理」について話すことを恥ずかしいと思って欲しくない。』『男なのでよく分からないし、あまりこちらからその件で話しかける事は出来ないが、何らかの力になりたいという気持ちは強い』(1-(2)質問⑥より)という声が聞けたことだ。考察で触れた通り、同じ環境人間学部で過ごしていく以上、生理の問題は女子生徒及び女性職員だけのものではない。上記のような考えを既に持っている学生がいることは、兵庫県立大学で生理の“尊厳”を広め、生理用品の無償提供を定着させるための後押しになるだろう。

## 5.2 今後の展望

生理用品の無償提供企画は、竹端ゼミの後輩に引継ぎ来年度からも運営する計画であった。ただ前述の通り、県が生理用品の無償提供を制度化させようとしている今、竹端ゼミとして担当する活動がどのあたりになるかは未確定なので、続報を待ちたい。

## 6. ゼミ教員より

永山のソーシャルアクションは、「大学生という一定の公共性」がある大学生のうちに起こすソーシャルアクション」として、「よい変化」を及ぼすことが出来た。もちろん、政策形成にコミットすることは容易ではなく、先行した明石市での実践と彼女

たちの学内でのトライアル設置が繋がることにより、それが神戸新聞で大きく取り上げられ、一定の社会性が生まれていくなかで、兵庫県知事の目にとまり、兵庫県の政策化へとつながっていく、というタイミングやご縁が重なった要素も大きい。

ただ、彼女が書いたように、「生理用品の無償配布」という現象の背後に二つの、相互に関連する理念的バックボーンがあった。一つが、「生理の尊厳」であり、もう一つが「包括的性教育」の視点である。

近年、子どもの権利条約や障害者権利条約では、needs based approach から rights based approach への転換が重視されている。前者は、専門家がニーズを査定する前提で、選別主義的であり、「真に必要な者に支給は限定する」アプローチである。一方後者は、生理用品が必要な状態にある人なら誰でも支援されるべきだ、という普遍的アプローチであり、ベーシックサービスの視点である。誰でも、どのような状態にあっても、尊厳が大切にされる、という前提がある。長らく日本社会においては、選別主義的アプローチが主流であったが、「生理の尊厳」アプローチは、貧困かどうかを選別されることなく、「必要な時は助けてほしい」という普遍主義的アプローチに基づいている。これが、アンケート調査にもあるように、生理時の女性の声に合致したので、彼女のプロジェクトは成功し、制度化につながる原動力にあったのだと思う。

また、包括的性教育に関して言うならば、永山が書いたように「はじめて規定」のため、これまで生理の問題は、女性同士がヒソヒソ話すことであり、政策形成プロセスにおいて男性中心主義が残っている中では、「なかったことにされていた」「可視化されていなかった」問題であった。しかし、明石市の先行的取り組みで明確になったように、「生理の尊厳」の問題はどこにでも存在する普遍的な課題なのである。それをなかったことにしないためには、教育レベルでも包括的性教育を行うことにより、「生理の尊厳」が当たり前のように語られ、常識になっていく素地を作っていくことが求められている。

今回の永山のソーシャルアクションや卒論は、「なかったことにされていた」問題の可視化であり、それを自分たちでトライアル設置をしながら制度化につなげていく、社会的価値を持った市民活動だった。それは、環境人間学部の総務課・学務課や乾先生を始めとした学内の関係教職員、無償提供にご協力下さった姫路市危機管理室、そして兵庫県知事や施策化に動いて下さった兵庫県庁職員、モデル事

業を教えてくださいました明石市職員、プロジェクトに関心を持ち記事化していただいた神戸新聞関係者など、様々なアクターが協力していただき、有機的に繋がる中でこそ、初めて可能になったことである。

多くの方々の「志のネットワーキング」に改めて心より御礼申し上げます。

#### 注釈

- 注 1) 学生団体「SOGIいろ」：2022年度発足。性の多様性・価値観・SOGIについて学び合い、兵庫県立大学内でのオールジェンダートイレの導入推進等の啓発活動を行う。活動内容は学内のトイレ環境調査や他大学のリサーチ、サインの作成等。
- 注 2) SOGI ウィーク：SOGIいろが企画した学内イベント。姫路環境人間キャンパスにて2022年10月24日(月)から28日(金)までの5日間、NPO法人 Mix Rainbowの方をゲストとした性の多様性がテーマの講演会・おはなし会“SOGIかふえ”，関連図書の展示等の企画を実施した。オールジェンダートイレのトイレサイン掲示もこの期間から開始。
- 注 3) 高良麻子「日本におけるソーシャルアクションの実践モデル」, 155 [図6-2 ソーシャルアクション実践モデルにおけるソーシャルワーカーによる方法・技術]を参考に、著者作成

#### 引用文献

- 1) #みんなの生理, 2021, 最終閲覧 2023年1月31日, 日本にも「生理の貧困」5人に1人の若者が「金銭的理由で生理用品を買うのに苦労した」(minnanoseiri.wixsite.com)
- 2) 公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン, 2021, 『「日本のユース女性の生理をめぐる意識調査結果」レポート』
- 3) 内閣府, 2021, 『経済財政運営と改革の基本方針 2021 日本の未来を拓く4つの原動力 ～グリーン、デジタル、活力ある地方創り、少子化対策～』20頁。
- 4) 男女共同参画局, 2021, 『令和3年度実施 地域女性活躍推進交付金(拡充)について』
- 5) 厚生労働省, 2022, 『「生理の貧困」が女性の心身の健康等に及ぼす影響に関する調査の結果について』
- 6) 高良麻子, 2017, 『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル – 「制度からの排除」への対処 –, 中央法規出版, 155, 183.
- 7) 男女共同参画局, 2021, 『地域女性活躍推進交付金(令和3年度実施(拡充): つながりサポート型)を活用した取組概要』, 最終閲覧 2023年1月31日. [https://www.gender.go.jp/policy/chihou\\_renkei/kofukin/r03/jisshi\\_r03.html](https://www.gender.go.jp/policy/chihou_renkei/kofukin/r03/jisshi_r03.html)
- 8) 松本禎明・中村ひかる・藤原道弘, 2022, 『中等教育機関における性教育実施に係る課題と対策に関する研究』, 九州女子大学紀要第59(1), 23-33.
- 9) ユニ・チャーム ソフィ, 『みんなの生理研修』, 最終閲覧 2023年1月31日 <https://www.sofy.jp/ja/campaign/minnanoseirikensyu.html>
- 10) 日経 xwomanSPECIAL, 『生理快適プロジェクト』, 最終閲覧 2023年1月31日 <https://special.nikkeibp.co.jp/atclh/DRS/20/seirikaiteki/>